Happy-Hamakan-News (HHN)

浜田医療センター附属看護学校

浜医看学発 2015. 3 月
第 1 巻　第 7 号

卒業式特集

目次

■[この1年]　看護学校の 26 年度・・・

この１年

H26 年度浜田医療センター附属看護学校のしあわせ

教育主事　中田　佳代子

当看護学校では 3 月 4 日に第 60 期生の卒業式を挙行しました。その日で、卒業生は 2018 名となりました。当校は、医療・看護を取り巻く社会情勢の大きな変化の中で、看護教育を見直し、大きな変革期に突入してきたといっても過言ではありません。21 世紀を見据え卒業生が遭遇する臨床や企業の期待にかなうためには、当校の教育の在り方を見直し、学習成果の導入、学習体験の統合の強化、学習強化の焦点化、広範囲な視点からの学習による成長という、4 つの看護教育の方向性を定める必要性を実感しました。看護にとってカリキュラムは動的で複雑さを増す環境の中で、うまくできる卒業生を育成していくことが求められています。

そこで、平成 26 年度は、運営目標を達成するため、“しあわせになる - ＨＡＰＰＹ”をスローガン、キーワードを対話・先見性・変革とし、学生が主体的学習に取り組む環境をつくりました。日頃私たちは、学生に、「ああしろこうしろ」と学生に押し付けているのではないか、との反省から、もっと学生が自ら学ぶことができるように e ラーニングの活用、Wi-fi タブレットの整備、インターネット環境の活用、入学前プログラムなど導入したり、ディスカッションができるゆとり空間をつくったり、教育環境を改善しました。教育方法について、教員は研修会や研究会に参加し、実習指導者と、国家試験に連動した指導について検討し、学生が自主的な学習を目指した指導を展開しました。

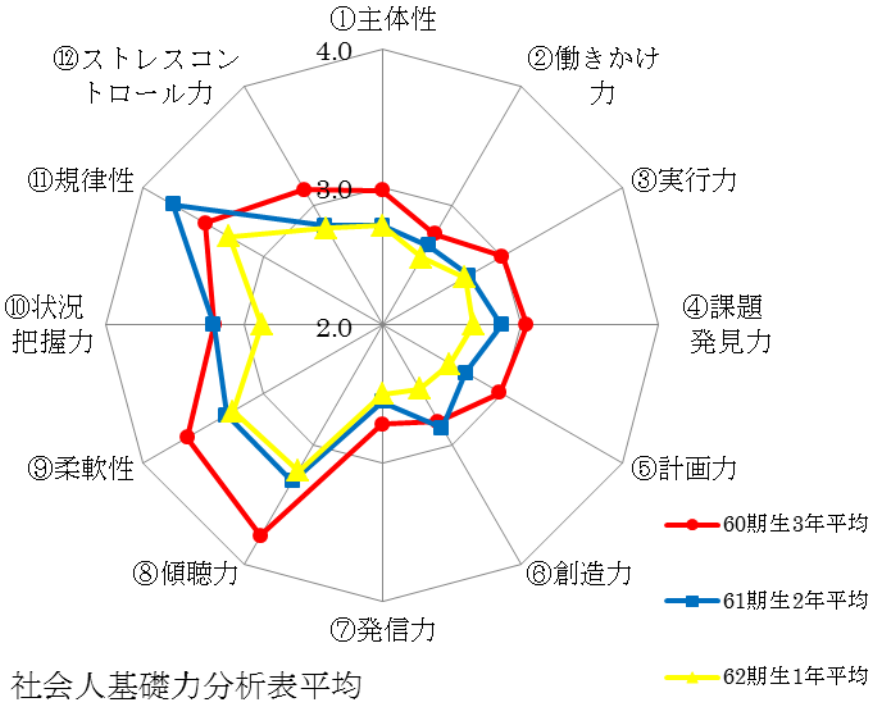


図１．社会人基礎力分析表平均

経済産業省によって提唱「職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力」について、10 月に全学生を対象に調査しました。その結果（図 1 参照）、学年が増すごとに、社会人基礎力が高くなっていることがわかりました。学年途中の 10 月に、⑦発信力、②働きかけ力、⑥創造力、①主体性など当校の教育の弱点も分かりました。

平成 26 年度日々の中での学生の成果としては、1 年生は自らの考えや意見を、カンファレンスなど公的な場で発言するようになったり、2 年生は行事の企画運営に責任をもってあたり、大きな自信と達成感を得ました。さらに 1 月からの本格的な実習を 2 クール終え、自らの学習の理解問題解決力を増すことができました。3 年生は全課程を修了し、国家試験を受験し、社会人としての責任と自らの役割の大きさを自覚し、今後の自己の目標や課題を明確にしました。その過程で、学びを統合し、活動を通じて得るものが大きいことを実感し、学ぶことの楽しさや苦しさに気づくことができました。平成 26 年度色々な取り組みをしてきましたが、今後は、これら教育の成果を可視化できるようデータ化や評価が課題となりました。今後とも当校の教育の実践にご支援ご協力よろしくお願いいたします。

卒業式

学校長式辞

さる 3 月 4 日（水）平成 26 年度卒業式を挙行しました。

学校長　石黒　眞吾

本日ここに多数のご父兄の皆様、ご来賓の皆様をお迎えして、卒業式を行うことができますことは何よりの慶びであります。

第 60 期生、45 名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

今、一人一人の方に卒業証書を渡し、皆さんの輝くような笑顔に接し、皆さんの喜びが伝わってきました。

私たち、浜田医療センターならびに附属看護学校の教職員は皆様のご卒業に心よりお喜び申し上げます。そして、この 45 名の卒業に心よりお喜び申し上げます。そして、この 45 名の卒業生の成長を見守り支えてこられたご家族の皆様にもお祝いを申し上げます。

3 年前、皆さんは看護師を夢見て、期待に大きく胸を膨らませ、看護学校に入学しました。この浅井町の校舎で学んできました。その間、たくさんの医学・看護の知識を前に途方に暮れ、病棟実習が始まったころは患者さんと関わることに戸惑い、自信をなくしたり落ち込んだりしたこともあったでしょう。しかし、皆さんはそれらを乗り越え、一人一人が努力を積み重ねてきました。そして、もう一歩で夢が実現します。私はこの度の国家試験におきまして全員が看護師の資格を取得されるものと確信しております。

皆さんが入学したころ、社会保障と税の一体改革素案が出され、2025 年に向けた医療の在り方が打ち出されました。それを踏まえて、昨年より地域包括ケアシステムの構築を目指したより具体的な施策が施行されてきました。高齢化社会を見据えたうえで、急性期医療からと介護・在宅までの連携がより重視されたものとなりました。

しかし、医療を取り巻く環境がどのように変わろうとも、急性期医療から在宅医療・介護まで含め、看護師としての皆さんの役割はますます重要になっており、病院のみならず、地域でのチーム医療の中心として広く社会から期待されています。そして、どのような領域であっても看護の本質は変わりません。

多くの皆さんは 4 月より看護師として医療現場で再びスタートを切るのです。そこで、私はお願いしたことがあります。いったい自分がどのような領域で、どのような立場で看護を行いたいかをほんの少しでも、この新たなスタート地点で思い浮かべてみてください。今は白紙かもしれません。これから、5 年、10 年と看護師として働き、様々な経験を積み重ねる過程で、ご自身が思い描く看護像を築いていただきたいと思います。

本学の教員は、学校生活を通して単なる技術知識の教育ばかりではなく、皆さんを家族同様に慈しみ、あなた方の人間的成長を真摯に願い支援してきました。皆さんにはきっと看護師の資格としての浜田看護学校の伝統を受け継いでいます。自信を持って社会に出て行ってください。

一方、皆さんには本校の先輩がそうであるように、生涯にわたり看護学を学習する姿勢を自ら課していただきたい。より専門的な、より治療に踏み込んだ技術や知識を習得し、キャリア・アップを図っていただきたい。いわゆる認定看護師あるいは特定看護師といった資格をめざすこともその一つです。しかし、これらの資格は決して医師に代わるものではありません。あくまで看護の立場からより患者に寄り添った治療を提供していくものであると考えます。裁量権の拡大と治療手段は看護ケアをより発展させ、患者に貢献するものです。

皆さんには、看護師としての自分の将来をしっかり見据え、自分なりの看護を確立していかれることを願います。

看護としての誇りと勇気を持って患者さんの立場に立って考えることを常に忘れないでいただきたいと思います。

最後に、本校を巣立っていく皆様に幸多からんことを願ってやみません。

本日はおめでとうございました。

平成 27 年 3 月 4 日

浜田医療センター附属看護学校　学校長　石黒眞吾

卒業式

松江医療センター副院長祝辞

松江医療センター副院長　矢野　修一　様

60 期生卒業生の方、本日は大変おめでとうございます。これから皆さんは看護の道に進まれることになります。

私は、松江医療センターの副院長です。本来なら院長が出席すべきところなのですが所要の手続きのため代理で出席させていただきます。みなさんの若々しい姿をみて本当に若くていいなあと思います。

さて、皆さんは看護についてなどインターネットで検索したりすると思います。しかし、実際の看護は検索したことが全て正解というわけではありません。じゃあどうするか？これはやはり考えることだと思います。皆さんはインターネットで検索すればすべての答えがでるとお思いでしょうが、現実はそうではありません。人間は弱弱しい存在ではありますけど、考えるという行動をして生きています。

皆さんの、自由な思考で考えるという行動をすることによって新しい道が切り開けると思います。しかしながら、医療の現場においては思考するだけではありません。では、どうするか、私がいつも言っていることなんですが、もし、患者さんの状態がわるかったらどうすればいいか？それを考えれば自ずと答えがでてくる。そう思います。皆さんはこの伝統ある看護学校を卒業して輝かしい未来が待っていると思います。しかしながら、試練もあります。その時はここで学ばれたことを思い出し、苦難を克服し立派な看護師になることを願っています。

卒業生のみなさん、教職員のみなさん、本日は大変おめでとうございました。

平成 27 年 3 月 4 日

松江医療センター副院長　矢野修一

卒業式

看護協会長祝辞

島根県看護協会長　春日　純子

木々の芽吹きに春の訪れが感じられる今日の佳き日に、ただ今卒業の栄を受けられました浜田医療センター附属看護学校 60 期生の皆さまおめでとうございます。また、今日まで限りなく愛情を注いで来られましたご家族をはじめ、関係者の皆様におかれましては喜びもひとしおのことと心からお祝い申し上げます。

ますます高度化する医療、患者の高齢化、価値観の多様化をみすえ、疾病構造が変化する中で、医療は大きな変革を迫られています。急性期から社会復帰までみていた病院完結から、複数の病気を持つ高齢者が、在宅で医療、介護、生活全般を観てもらうよう地域完結型へと動き出しています。激動する社会を背景に、これからの医療は、多種多様な職種と連携していくことが求められ、看護師に求められる役割への期待は高まるばかりです。

今はほっとされているでしょうが、看護の学びは、基礎教育だけで終了するものではありません。生涯にわたり常に学び続けることが責務です。職業に就くこと、資格をもって働くことには責任が課され、大切な人の命を預かる台本なしの本番ドラマです。IPS の山中教授は、…。患者さんからのたくさんの失敗や成功の贈り物をもらってください。

先日研修会の話です。講師の先生が、あなたはもう少ししか命がありません。その時に看護師にどのような看護を受けたいか話し合ってくださいと言われました。「はい」と手を挙げて答えたこと、「私のためだけに時間使ってほしい。たとえ少しの時間でもいい。私のところにいるときは自分だけを見ていてほしい」と。

新卒ナースが入職して 2 ヶ月目でした。配膳をして、患者さんに怒られた。婦長を呼びました。新人ですのでといいましたがそれは自分たちの都合で関係ないと、怒りは収まりません。婦長は新人をその日の受け持ちから外すと考えました。しかし、彼女は、自分が悪いので患者さんに謝ります。受け持ちも続けさせてくれるよう頼みました。退院の時の患者さんからありがとう、あなたがいてくれてお蔭で元気に退院できましたと笑顔でお礼を言われました。いつどんなときも人間として常に真摯であれと教えられました。

看護は、生涯をとおして最後まで、その人らしく生きることを援助することです。どうか今の清々しい気持ちを忘れることなく、患者さんからの学びや経験を糧にして、研鑽を積まれますよう願っています。

卒業生の皆さん、そして本日お集まりの皆さま方のご多幸と輝かしい未来を祈念して祝辞といたします。

平成 27 年 3 月 4 日

島根県看護協会長　春日純子

卒業式

卒業生答辞

３年生　岡田　彩

冬の寒さも次第に和らぎ、春の温かさを感じるこの良き日、私達 60 期生 45 名のために、このような素晴らしい卒業式を挙行していただき、誠にありがとうございます。卒業生を代表し、心よりお礼申し上げます。また、先ほどは学校長をはじめ、来賓の方々、さらに在校生の皆様から温かいお言葉をいただき、ありがとうございました。

この 3 年間、看護師になるために大切なことをたくさん学んできました。多くの方に支えられてきた 3 年間でしたが、私はまず未熟な私達を快く受け入れてくださり、多くの学びを与えてくださった患者様はじめ、みなさまに深く感謝したいと思います。

臨地実習を経験して、特に印象に残っているのは慢性期の実習の時に受け持たせていただいた糖尿病を患っておられる患者様です。その方は、数 10 年前に糖尿病と診断されてから内服を自己中断され、糖尿病の合併症を引き起こされた方でした。私は、患者様の内服の中断に至った背景を知り、衝撃を受けたと同時に、少しでも患者様の経済的負担は軽減できないのかと悩みました。私が直接患者様の経済的負担を軽減することは難しく、患者様の負担を考慮せずに内服の継続指導をすることは患者様のためにならないと思いました。私はそこで限界を感じ、学生ではどうすることもできないことなのだと諦めかけてしまいました。私は、その実習まで患者様に寄り添った看護をしたいと努力してきました。しかし、私は患者様の様な経験をしたことがなく、患者様の苦痛に寄り添うことなどできないのだと初めて気付きました。その気付きは、自らの力不足を実感させるだけでなく、自分が今まで頑張ってきたことを無意味に感じさせる気付きで、できていない自分を突きつけられるようでした。そんな時、悩んでいる私を見兼ねた先生や友人が相談に乗ってくれ、薬剤について相談をすると良いのでは、というヒントで、看護師の方に患者様の内服の種類を減らしていただくことはできないかということを医師に相談してほしいということを伝えました。結果的には、あまり種類を減らすことはできなかったのですが、この経験を通して、学生であっても自分から声を出していくことで、患者様に沿った看護に繋げられる可能性があることを実感し、自分から声を出していくことで看護の可能性が広がることを学ぶことができました。今後も、看護を行っていくうえで未熟な自分やできない自分と向き合わざるを得ないことも多くあると思います。しかし、できない自分を認め、日々勉強に励み、チームメンバーに相談していくことで患者様の力に繋げられることもあるかもしれません。今後は、この実習で学んだことを更に磨いていき、患者様の力になれるよう努力していきます。

この 3 年間、私が看護師になるうえで大切なことを学んでくることができたのは、患者様だけでなく、たくさんの方の支えがあったからこそだと思います。病院長をはじめ病院関係者の皆様、各施設の指導者様、講師の方々には、未熟な私達を受け入れてくださるだけでなく、お忙しい中私達の学習のために多大な努力を協力して下さいました。そのおかげで、私達は看護の基本となる知識や技術を培い、机上の学習と臨床の実際の学習を統合して学びを深めることができました。本当にありがとうございます。

教務の先生方には、私達 60 期生は人数も多く、個性的で緊張感に欠ける部分もあり多くのご迷惑、ご心配をおかけしました。先生方はそんな私達に対して優しく、時に厳しく、熱心に向き合ってくださいました。国家試験に際しても、なかなか成績が上がらない私達に先生方全体で助けてくださりました。分からない部分は補講を開いて丁寧に教えてくださったり、私達に合わせて遅くまで残ってくださったり、先生方の支えがあったからこそ国家試験では全員が全力で試験を受けることが出来ました。本当にありがとうございました。

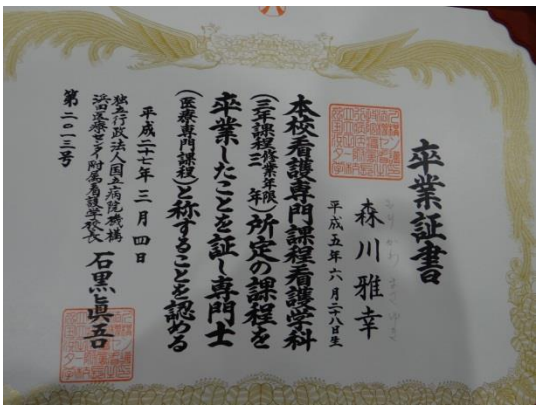
在校生の皆様、看護師という道を目指していく中で、これからきっと多くの壁にぶつかり辛いこともあると思います。しかし、そんな時はきっと仲間や教務の先生方が力になってくれるはずです。これからもどうか挫けずに、仲間と支え合いながら頑張っていってください。

そして、看護師になると決意してから今日まで応援してくれた家族には本当に感謝しています。私が看護師を目指した原点は、家族です。私は 16 歳の時に父を直腸癌で亡くしました。その時から、母は女で一つで私達兄弟を育ててくれました。父の事を思い出すと弱音を吐いたらいけないと思いつつ、辛い時にはつい母に電話をしてしまいました。時には優しく話を聞き、そして「自分で選んだ道なんだから頑張りなさい」と喝を入れてくれました。これからは、私が家族を支えていけるように頑張っていこうと思います。また、患者様の家族が持たれている辛さを受けとめ、家族を含めた看護ができるように努力していきます。

また、この 3 年間、いくつも大きな壁にぶち当たり、挫けそうになり逃げだしたくなることが何度もありました。それでも、私がここまで逃げ出さずに頑張ってくることが出来たのは 60 期生のみんながいたからだと思います。最初は人数も多いこともあって、纏まることやクラスメイトについ甘えてしまって個人個人が積極的な行動ができない部分もありましたが、最後には一人一人の積極性が少しずつ見られるようになってきたと思います。みんな明るく、優しい人達ばかりで、私は幾度となく 60 期生の温かさに助けられてきました。辛いことも多かった 3 年間でしたが、こうして振り返ってみると同じくらい楽しい思い出もあり、私にとってこの 3 年間は一生忘れることのできない宝です。これからもこの仲間たちとの思い出を糧に、今後も自分の選んだ道をしっかり歩んでいきたいと思います。

私達は今日、皆様に見守られながら、この学び舎を巣立ちます。本校で学んだことをはじめ、出会った方々から頂いた大切な学びを胸に深く刻み、今後も看護師として日々努力を怠らず精進していきます。

今後、社会の中で貢献することを誓って答辞の言葉といたします。



平成 27 年 3 月 4 日

卒業生代表　岡田　彩

卒業式

在校生送辞

自治会長　大島　涼

厳しかった寒さも少しずつ和らぎ春の訪れを感じる今日のよき日に、浜田医療センター附属看護学校を卒業される第 60 期生の皆様、ご卒業おめでとうございます。在校生一同、心よりお祝い申し上げます。

先輩方を身近で見てきて一番印象的だったのは学習に真摯に取り組む姿勢です。実習ではどのように対象理解をして関わっていけば患者様のためになるのかということ常に真剣に考えておられました。
実習から帰ってくると学校ロビーやゼミ室で輪になり、先生方の指導を受けながら時に涙を流し、時に笑ったりしながら、生き生きと看護について語っておられました。そこには看護を学ぶ者の在り方が示されており、私達の目標になっています。今、私達 2 年生は領域別実習が始まり、先輩方の示してくださった姿勢を見習いながら実習に取り組んでいます。何か困難に直面する度に、改めてその壁を乗り越えてこられた先輩方の偉大さを知り、私達が進むべき方向を示してくれる道標になってくださっています。また、国家試験の前になると朝早くから夜は 9 時まで居残って勉強をされており、その姿に専門職業人としての責任を持ち学習し続けることの必要性を教えられました。

僕は現在自治会長をしています。学校をまとめるということはとても大変ですが、先輩方から教えられたことを実践し、今は後輩にも伝えていかなければならないという使命感を持っています。看護師になったらチームで協働して一人一人の患者様を支えていくことになりますので、この体験はきっと将来に役立つのではないかと思っています。

学校祭では、先輩方の代から病院フェスタと共同開催にするという新しい試みに取り組まれました。先輩方が苦労しながら新しい道を開いて下さったおかげで年々学校祭が地域社会をもり上げるすばらしいものとなりつつあります。病院スタッフが皆で協力してフェスタを盛り上げる様子を目の当たりにし、看護師にも企画力・運営力・統率力が必要だということを学びました。

看護学校での 3 年間はあっという間だったかもしれませんが、その中でたくさんの思い出を残されたことと思います。楽しいこと、嬉しいこともあれば辛いこともあったことでしょう。しかし、仲間と協力して困難を乗り越え、患者様の思いに寄り添う看護とは何かを試行錯誤しながら見出しておられました。

私には親しくしてくれている先輩がいます。たわいもない話をする時もあれば看護について話をする機会もありました。ある実習で患者様のためになる看護とはどのようにすれば良いか悩んでいました。その患者様は終末期であり日中ベッドで寝ていることによって筋力が低下するために日中の離床を促したほうがよいという方針が立てられていました。しかし、患者様からは「しんどいから動きたくない」との発言があり、どのようにしたら患者様の思いに沿った看護を行うことができるか悩みました。すると先輩が「どうした」と言って一緒にいろいろ考えてくれました。はっきりとした解決策が見つかったわけではありませんが、先輩と語り合うことで、様々な角度から患者様をとらえなければいけないことに改めて気づくことができました。一緒に勉強をして疾患について教えてもらったり、技術の工夫点を教えてもらったりもしました。時には兄のように慕い、時には友のように笑いあうことができ、先輩との交流は浜田で得られた大きな宝物になると思います。

先輩方はこれから、それぞれの未来に向かって歩まれることと思います。時には今まで以上の困難にぶつかる時があるかもしれません。そんな時はこの看護学校で過ごしたことを思い出してください。努力して多くの困難を乗り越えてこられた先輩方なら、これから降りかかるどのような困難も乗り越え成長につなげていかれると信じています。そんな先輩方は私達の目標です。先輩方の看護に対する思いを引き継ぎ先輩がたのように立派な看護学生になれるよう、これまで以上に講義や実習に真摯に取り組み、在校生一人一人がリーダーシップ・メンバーシップを発揮し、お互い高め合い、支え合って前に進んでいきたいと思います。
最後に皆様のご活躍とご健康をお祈りして送辞の言葉とかえさせていただきます。

平成 27 年 3 月 4 日

在校生代表　大島　涼

謝恩会

謝恩会を開催して

60 期生謝恩会実行委員長
藤田　寿紀

私たち 60 期生は、今までお世話になった方々に感謝の意を伝えるため、3 月 4 日(水)19:00 からワシントンホテルにて謝恩会を開催しました。会には、3 年間でお世話になった院外講師、院内講師、教職員の皆様を来賓としてご招待し、約 70 名の方々に来ていただき盛大に行うことができました。謝恩会の企画から運営まで、「どうすれば感謝の気持ちが伝わるか」と考えながら謝恩会のテーマを「感謝-学びある日々に-」と決めました。

そして、感謝を伝えるという意味で各テーブルの来賓の方々一人一人に感謝の言葉を伝え、お世話になった方々に花束を贈ろうと考えました。

当日は、卒業生全員が羽織袴やスーツ等、正装をして来賓の方々を迎えました。式の初めでは、卒業生代表として、坂本文さんが「新たな一歩を踏み出すことができることも親身になって指導してくださったおかげであり、今日は皆様に感謝の気持ちが伝わる会にしたい」と挨拶をしました。私たちは皆、初めは緊張していましたが、各テーブル席で来賓の方々と実習や講義のことについて話し、とても和やかな雰囲気で会は進んでいきました。

飯田副学校長より「命に関わる職業につく中での責任を持つこと、3 年間でのすべての学びを生かし、これからの命に関わって欲しい」というお言葉をいただきました。私は、命に関わる仕事であるという責任感をあらためて感じ、自分たちの学んできたことを看護として活かせるように頑張っていこうと決意を新たにしました。

また、会の最後には中田教育主事より「学生時代のみんなで同じ目標に向かっていくといった体験や、そこで作った仲間を大切にして頑張ってほしい」というお言葉をいただきました。来賓、一人一人に感謝の言葉を伝えていく中で、沢山の方々にお世話になっていたと実感しました。

謝恩会を終えふり返ってみると、講師や教職員の皆さまだけでなく、受け持たせていただいた患者様や家族にも感謝していかなくてはならないと感じました。

実行委員長として拙い部分がありましたが、60 期生全員の協力があり、クラス全員で行う時のパワーを感じ、自分たちで運営していくことが出来たという自信にもなりました。この経験を生かしてこれから新しい環境の中でも頑張っていこうと思います。

私たち 60 期生の成長に関わっていただいた全ての方々に感謝します。3 年間、本当にありがとうございました。

卒業生進路

３年生の進学・就職試験について

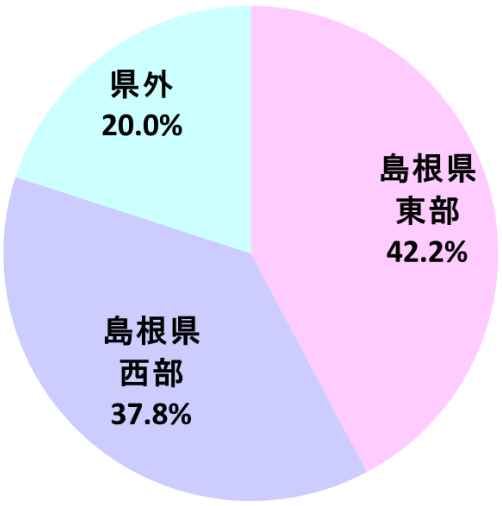
３年生担任
小田川　良子

当校の教育目的に、「本学校は、看護師として必要な知識及び技術を教授し、独立行政法人国立病院機構及び社会に貢献し得る有能な人材を育成することを目的とする」とあります。

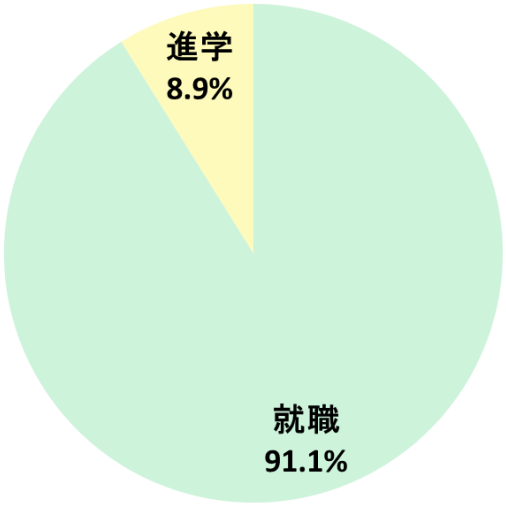
平成 26 年度の卒業生 45 名は、全員が就職・進学と進路を決め、3 月 4 日に卒業しました。就職者は 91.1%、進学者は 8.9%です。就職者については、国立病院機構の病院への就職率 62.2%、そして島根県内への就職率 82.9%と高い値となっています。

いよいよ、卒業生は 4 月 1 日から新社会人となります。在学中に話していた「地元へ就職して、今までお世話になった方々へ恩返しができるよう、看護師としてしっかり働いてきたい」という言葉が実現できるよう、それぞれの道で頑張ってほしいと思います。また、在校生も当校の教育目的を理解し、先輩たちの姿勢を忘れず、その思いを引き継いで看護師を目指してほしいです。

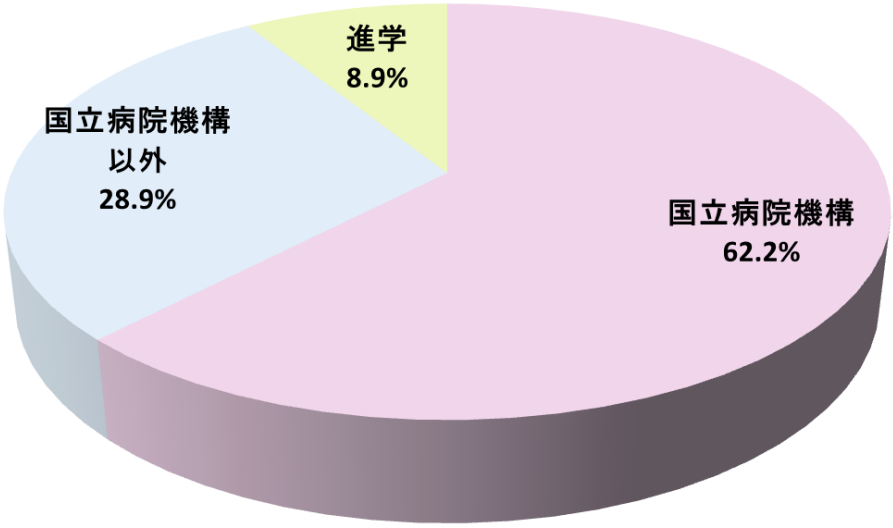
60期生の就職･進学先　地方別



60期生の就職or進学（%）



60期生の就職･進学先　（%）



国家試験

第 104 回国家試験を受けて

３年生副担任
藤井　光輝

１．看護師国家試験について

平成 27 年 2 月 22 日（日）に広島会場にて第 104 回看護師国家試験を 45 名が受験しました。看護師国家試験は、「看護師国家試験は、看護師として必要な知識及び技能について問うものである。」と厚生労働省が示しています。以前は看護師不足が深刻であり、外国人看護師採用の動きが強かったのですが、厚生労働省が病院を削減して、在宅医療の方向性を示す方針を打ち出したことや看護師離職等による看護師数の減少が約 2.4 万人で新卒入職者数は約５万人ということ、潜在看護師が推測 71 万人ということから看護師数不足は深刻ではなくなっています。このことからも今後は「落とす試験」になることが予測されます。

ちなみに、第 93 回(平成 16 年)から合格率は 90%前後で推移していますが、第 87 回(平成 16 年)には合格率が 83.6%という時もありました。国家試験は絶対的な基準で判断される資格試験ではなく、看護師の需要と供給のバランスから合格者数が決められるということです。

さて、看護師国家試験の概要ですが表１のように 5 時間 20 分かけて問題に挑むため 1 問 1 分 30 秒程度で回答していくことになります。試験科目は、「人体の構造と機能」、「疾病の成り立ちと回復の促進」、「社会保障制度と生活者の健康」、「基礎看護学」、「成人看護学」、「老年看護学」、「小児看護学」、「母性看護学」、「精神看護学」、「在宅看護学」、「看護の統合と実践」から構成されています。この科目の配分はある程度決まっています。設問は、6 年前より 5 肢択一問題や写真素材を用いた問題が導入され、2 年前に計算問題の非選択式形式が導入されました。少しずつ問題の難化が進んでいる状況です。

２．第 104 回看護師国家試験に関して

例年の看護師国家試験との違いは「臨床での判断を問う問題が多い」という点です。

必修問題は、昨年同様に午前１～25、午後 1～25 の計 50 問から構成されていました。55%（27 問/50 問）が第 93 回～第 103 回の必修問題として試験に出題された問題に類似していました。

一般・状況設定問題は、優先順位を問う問題（「最も適切なのは」「最も疑われるのは」「優先度が高いのは」「最も考えられるのは」など）が 27.9%と 103 回の 16.7%、102 回の 10.8%、101 回の 13.8%と比較しても多く、丸暗記ではなく応用ができなければ難しい問題でした。また、検査データからの解釈やレントゲン画像からの判断なども含まれていました。そのため、受験生からは例年よりも難しかったとの声が多く聞かれました。当校の正答率は、平均点 194.7/250(77.9%)で例年の合格基準を上回ることができました。

3 月 25 日の合格発表に桜が咲くことを願うばかりです。

表１　時間配分（看護師国家試験　第 104 回）

	方式	出題数	時間
午前	客観式必修問題（四肢択一・五肢択一）	25 問	2 時間 40 分
	客観式一般問題（四肢択一・五肢択一・五肢択二）	65 問	
	客観式状況設定問題（四肢択一・五肢択一・五肢択二）	30 問(10 症例)	
午後	客観式必修問題（四肢択一・五肢択一）	25 問	2 時間 40 分
	客観式一般問題（四肢択一・五肢択一・五肢択二）	65 問	
	客観式状況設定問題（四肢択一・五肢択一・五肢択二）	30 問（10 症例）	

特別講演

「21 世紀の看護を支える看護職者になるには―看護を学び続けることによって成り立つもの―」を傾聴して

３年生　三原　華英

今回、講演会を聞かせていただいて、自分の看護観を改めて見直す機会になりました。

今まで私は看護職者の仕事する場（領地）として、病院や災害の現場などと、限局した場所しか考えていませんでした。しかし、先生のおっしゃったように看護職者は人がいて生活している場には必要になってくるものだなというように認識を改めました。病院の人がいないからといって看護を提供しないということではなく、健康である人が、その状態を維持・向上させていくために支えることも看護職者としての役割であると感じました。

また”学びつづけることの大切さ”も改めて感じました。これから医療機や、わたしたちを取り巻く多くのものが進化していくと思います。その全てに対応し、正しい情報を得て提供していくためには色々なアンテナを常に張り、日々学んでいくことが必要になってくると思います。新しい技術にばかり頼るのではなくその中から本当に必要であるものを選び使っていくためにも自分自身に正しい知識が必要になってくるのではないかと考えました。ロボットなどの開発などもどんどんすすんできており、介護や看護（診療の補助など）をロボットがするという時代がくるかもしれませんが、私も先生がおっしゃっていたように、人の手だからこそ伝わる手の温かみだったりもあると思うので、自分自身の看護技術を日々磨いていき、自信を持ってケアを提供していきたいです。

また、看護技術については、先生はご講演の中で技術の考え方を教えて下さり、私自身これからもっと伸ばしていきたいと考えています。看護師が何を提供しているのか、患者様はわからないという場面は多々あるかもしれません。これから何の援助を行うかだけでは何故行うかをはっきり伝えられるようになりたいと思いました。そうしなければ自分の行っている看護の必要性を相手に分かってもらえないということにもなるかもしれないからです。

また、先生が図を使って説明をしてくださって”看護技術”と”対象の理解”について、私自身実習中には、”対象の理解”を重視していることが多かったように思います。先生のお話を聞かせていただいて確かに、しっかりとした技術の基盤ができていれば患者様に提供する看護のほとんどは取得することができているのだと思いました。そこに患者様の個別性である対象の理解をつけ足していくことで、確実なものになっていくのではないかと考えました。大切とされやすい対象の理解ですが、緊急時にどちらが大切かと言われれば、確実な看護技術です。私は 3 年生で、今年でもう学生ではなく、実際に現場で働くことになります。また、働きだすまでには少し時間がありますし、実際に働きはじめてからも技術を磨いたり、学び知識を増やしていくことはできます。今回の講演で学ばさせていただいた、学び続ける姿勢をずっと忘れずにいたいと思います。

今回、お話を聞かせていただいて、これから臨床の場に出て働いていくうえでの心づもりができました。どんどん変わっていく生活の環境や、看護のエビデンスなどたくさんのことに興味を持って、日々学び、患者様の為に看護を提供していけたらと思います。本当に貴重なお話をありがとうございました。

特別講演

３年生　佐々木　美穂

今回、卒業記念特別講演で田島先生の講演を聞いて、今まで自分が患者さんに行ってきた看護を振り返る良い機会になったと感じました。

講演を聞いて、自分が患者さんにできることは何か、ということばかり考えていたことに気づきました。講演の中で、「看護師に何が求められているのか、ということや自分たちが常にどのような場にいるのか、ということをしっかりと考えていくことが大切である」と話してくださりました。患者さんに自分は何を行えるのか、ということだけでなく、患者さんが何を求めているのかを考え、把握することによって同じ目標に向かうことができ、患者さんに満足してもらうことができるのではないかと思いました。また、何を求められているのか、ということを考えるうえで、看護師は患者さんの立場に立って考えなければならないと今更のようですが感じました。患者さんは疾患の治療を行うために病院に入院しているため、円滑に治療を受けられるように看護をしていかなければなりません。そうしたときに、患者の立場にたち、何を求めているのかを考え、患者の気持ちを代弁できるような存在である必要があると思いました。

また今回の講演で、対象の理解と看護技術がなければケアなども提供することができない、という基本的なことも改めて考えることができたように感じました。今、卒業前演習でケアの基本的なことから見直していると、いかに自分たちが教科書通りの手順でケアを行っていたのか、ということを感じました。実際に自分たちが行ってきた手順でケアを行ってみると、体位によってとても水などの飲み込みがしにくかったりするなど、患者さんにとても苦痛なことをしていたのではないかとふり返りました。患者さん一人一人個別性があり、それに合わせることによってより患者さんの安楽や満足感などを感じてもらえることができる、という基本的なことをしっかりと考え、基礎に戻って考えていかなければならないと思いました。

これから臨床の現場で働いていく上で、実習との違いに戸惑ったりすることが多々あると思います。だからこそ、自ら学び続ける姿勢を大切にし、ケアの基礎を忘れず、個々の能力、看護師本来の力を高められるようにしていきたいと思いました。

学習状況

当校の３年間の実習成果と技術経験状況

３年生副担任　藤井　光輝

Ⅰ　実習成果

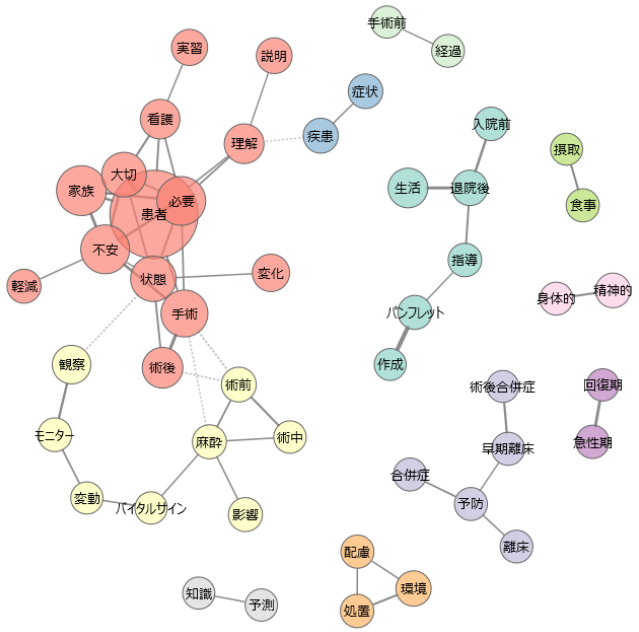
看護学校の３年間で行う実習の総時間は 1035 時間で、カリキュラムの 1/3 を臨地実習が占めています。臨地実習は専門分野Ⅰ、Ⅱ、統合分野から構成されています。

専門分野Ⅰは、１年から２年次に行われて、人との関わり方や環境を学んでいきます。

専門分野Ⅱは、２年次後半から３年次中旬まで行われ、成人看護学実習（急性期、慢性期、回復期、終末期）、小児・母性看護学実習、精神看護学実習といった各論実習を行い疾患の理解と看護の実践を学んでいきます。

統合分野は、在宅看護論と看護の統合と実践実習から構成され、各論実習が終わり最後の総まとめとなる実習で、難易度の高い技術を必要とする看護や看護マネジメントを学んでいきます。

当校では、これらの実習別で実習目標を達成できているのか評価して、来年度に活かせるように実習要綱を見直しています。見直しは、①ID（インストラクショナルデザイン）という手法を用いて、教授方法を実習評価と照らし合わせ評価、②テキストマイニングという手法を用いて 、「学びそのもの」を可視化して、実習目標の内容が学べているのか評価しています。



３年間の実習成果はたくさんありますが、少し学びを紹介したいと思います。図は成人看護学（急性期・回復期）での学びを抽出したテキストマイニングです。

①【赤】では、患者や家族の手術や術後の状態に対する不安を緩和するという内容が学んだ内容として抽出されました。

③【黄】では、術前・中・後の観察を表した内容でした。具体的には、「術中は、患者さんの状態をモニターだけからみるのではなく、体にふれてみたりして観察していくことが重要だということを学ぶことができました。声に出して状態や思いを伝えることができないからこそ、看護師がしっかりと観察、アセスメントを行い、患者さんの代弁者になっていく必要があることも学びました。」、「身体侵襲の高い患者さんは、短い時間で患者さんに負担がかからないようにフィジカルアセスメント（体の観察）やケアを行っていく必要があるとわかった。そのため、患者さんの疾患を十分に理解し、必要最低限の観察項目をあげ行っていくことが大切だと感じた。ケア中もモニターの変化がないかを観察しながら行い、患者さんに負担の少ないように保温に努めたり、ケア中の体位変換を少なくしたりするなどしていく必要があるとわかった。」などでした。他にも、【紫】では、術後の合併症を予防するために早期離床を促すという学びなどがありました。このように、各実習での学びを得て、統合分野Ⅰ・Ⅱの実習を行いました。

統合分野Ⅱでは、看護管理、複数患者受け持ち、夜間における看護を３本柱として実習を行いました。この実習が三年間の集大成となります。学生は、将来看護師として働く自分がどのような点に考慮していくべきなのか、今まで行ってきた看護はどんな意味を持っていたのか振り返り、看護の素晴らしさと奥深さを実感するとともに、これから望む看護に関して自己の責務を明確にしていくことができたようです。

Ⅱ　基礎看護技術経験状況について

看護技術は、人間に対する専門的な知識に基づいて判断され、対象者と看護者の間の相互関係で成り立ち、対象の安全・安楽・自立を目的とした意図した直接的な行為で、看護者自身の看護観が反映されるものとされています。看護師の行う基礎看護技術に関して真っ先に思いつくのは「採血」や「点滴」でしょうか。この基礎看護技術に関しては、厚生労働省から卒業までに身につけるべき技術が到達度（到達度Ⅰ：単独で実施できる、到達度Ⅱ：指導のもと実施できる、到達度Ⅲ：学内演習で実施できる、Ⅳ：知識）と共に示されています。

この項目は全部で 89 項目あります。当校では、看護技術進度表を作成して１年次から基礎看護技術の教育（技術チェック、演習）を行っています。そして、実習前に技術演習を行い、臨地実習で患者に合った基礎看護技術を提供していきます。臨地実習において「単独で実施できる」とされている 15 項目のうち全員実施できたのは９項目でした。残りの６項目もほとんどの学生が就職前に経験することができました。また、他校ではあまり経験できない項目でも当校は附属看護学校のメリットを活かし、臨床指導者会議という会議を１回/月設けて、学生の技術経験状況を確認しながら技術教育を行ってきました。例えば、他校ではあまり行えていない「口腔内・鼻腔内吸引」は全員が見学をして半数が実施することができました。また、到達度Ⅱ（指導のもと実施できる）は 45 項目ありますが、臨地実習で３割以上の学生が体験をすることができました。

昨今、患者の承諾や指導体制が整わないことから基礎看護技術を体験する場が減少する中で、学内技術チェック及び演習での技術の保証と臨床での基礎看護技術の確認がこれだけ行えているのは病院との連携がとれる附属看護学校だからこそと自負しています。この３年間の臨地実習での学びが、円滑な職場適応につながり、これから看護師として働く卒業生の力となり、社会に貢献できる看護師になれればと教員一同願っております。

まとめの会

基礎看護学実習Ⅰ（その2）まとめの会について

１年生　勝部芙美　松尾純恵

基礎看護学実習Ⅰ（その 2）を平成 27 年 1 月 28 日（水）～2 月 4 日（水）に実施しました。下記のスケジュールに沿って自分達の学びを発表しました。

2 月 25 日(水)に基礎看護学実習Ⅰ(その 2)のまとめの会がありました。そこでは、1 月 28 日(水)から 2 月 4 日(水)までの 5 日間の実習の学びを「自分の体験を語り、学びについて考える」という目的のもと、病棟ごとに発表しました。

あるグループでは、血圧測定の方法によって値に違いが出るのかという疑問について文献で調べるだけでなく、実際に自分たちで実験を行っていました。

その発表を聞いて、本当に患者のためになるかを自分自身で経験し患者さんに提供することで、患者の気持ちに寄り添った看護が行うことができると学びました。したがって、文献に書いてあることが正しいかどうか疑問を持ち、自分たち自身で納得できる答えを見つけられるように探求することが大切であると考えました。また、文献を探す際に、自分たちの意見を持ち、その意見に合った文献を用いると、より相手に理解してもらいやすいということもわかりました。

今回のまとめの会では、5 月のまとめの会の際には自分から意見を言えなかった人も積極的に意見を言うなどして、活発な意見を出し合うことができました。しかし、質疑応答の際に、相手の求めている質問に対しての答えを言えていなかった時もあったため、質問を理解して焦点に合った答えを出すことができるようにすることがこれからの課題だと思いました。また、その議論に対して各々の意見も言うことで、様々な視点からさらに学びを深めることも必要だと思いました。今回のまとめの会で学んだことをその場で終わりにはせず、今後の講義や実習に生かしていきたいと思います。

目的：自分の体験を語り学びについて考える

目標：１）自分の体験のプロセスを語る　２）体験の意味を明らかにする　３）意見交換の意味を知る

13:10～13:15	開始の挨拶	
13:15～13:25	テーマ	病棟
	１Ｇ：「援助を通して必要だと感じたこと」	３階北
13:25～13:35	２Ｇ：「一人ひとりに合った看護」	３階南
13:35～13:45	３Ｇ：「患者の本当の思いやニーズを知り、援助につなげていくために私たちができること」	４階南
13:45～14:05	質疑応答、病棟指導者講評	
14:05～14:15	休憩	
14:15～14:25	４Ｇ：～患者に合わせた援助とは～	５階北
14:25～14:35	５Ｇ：患者の思いとニードに沿った看護行為とは	５階南
14:35～14:45	６Ｇ：「対象に合わせた援助やコミュニケーションを考える」	６階緩和ケア
14:45～15:05	質疑応答、病棟指導者講評	
15:05～15:10	主事総評	
15:10～15:15	閉会あいさつ	

看護を語る

看護を通じて繋がれたある人との不思議な縁

２年生担任　隈部　直子

看護師になって２年目、私はある女性（以下Ａ氏とする）と出会った。同じ九州出身で、「若いとき片道切符だけを持ってここまで流れてきた」と言うその人は、どこか懐かしさを感じさせる気風のよい女性であった。「ちょっとあんた、週刊誌買ってきて」、「ちょっとあんた、この焼き鳥差し入れにもらった。あんたも食べて」など、困ってしまうようなことも言われたが、母親か叔母と接しているような気持にさせられる存在でもあった。膀胱癌で膀胱全摘・回腸導管造設術を受けており、ウロストーマの管理をしていかなければならなかったが、なかなか自己管理がうまくいかず、尿が漏れてしまうことが度々あった。一度、深夜勤務で２時の巡室をした時、「ちょっと、あんた」と暗がりから私を呼びとめ、ビシャビシャに濡れてしまった腹部を指示し、「あんたが来るまで待っとんたんよ。何とかして」と怒ったような、悲しそうな顔で言われたこともある。私は寝衣の濡れ具合から、「これは随分前から漏れていたな…。ここまで濡れてしまうまでに準夜の〇〇さんに頼めば良かったのに…」と勤務開始後すぐに決して簡単ではないウロストーマのパウチ交換と濡れてしまった寝衣・シーツの交換をしなければならないことに正直なところ苛立ちを感じていた。しかし同時に、決して器用ではない自分を頼りに思ってくれたことに嬉しさを感じないでもなかった。パウチ交換を終え、清拭し、寝衣とシーツを交換する間、Ａ氏は憮然としていたが、終わると「ありがとね。これで安心して眠れる」と少し照れくさそうに笑っていた。

Ａ氏は膀胱全摘・回腸導管造設術を受けたが、結局は再発を繰り返し、数回の化学療法も効果はなく、徐々に癌は進行していった。最後の入院の時、私は救命救急センターに搬送されたＡ氏が転棟してくるのを迎えに行ったが、あまりのやつれ方に絶句してしまい、何も言うことができなかった。胸が押しつぶされそうになりながら、無言でＡ氏の乗る車椅子を押した。Ａ氏は悲しそうな顔をしていた。

その後、Ａ氏は緩和的なケアを受けたが、１週間程度で永眠した。その翌々日だったか、はっきり覚えてはいないが、休日でＨ市に出ていた私は、普段はまず通らない小道に入り込みぼんやりと歩いていた。ある葬祭場の前を通りかかった時、私は「はっ」とした。Ａ氏の名前が書かれた大きな花輪が飾られていたのである。超常現象など信じず、「あの世なんかない」と思っていたが、この時は「呼ばれたのだ」と確信した。青く澄み切った冬の空にＡ氏の笑顔が浮かび「ちょっと、あんた」と呼ばれたように感じた。Ａ氏とのつながりは、患者と看護師の関係を越えた、人と人との繋がりであったのではないかと今も思う。

お知らせ

4～5 月の行事予定

4 月 3 日（金）
オープンスクール

4 月 6 日（月）
始業式

4 月 9 日（水）
入学式

4 月 16 日（木）
臨地実習

4 月 30 日（木）
ナイチンゲール生誕祭

5 月 1 日（金）
スポーツ大会

編集後記

あっという間に 3 月、看護学校を卒業するとそれぞれの人生が始まります。いよいよ社会人。寂しい気持ちと新しい門出とで複雑な気持ちかも知れません。卒業する人にとっても、そうでない人にとっても、区切りの季節です。何かに区切りをつけるのに最適の時です。引越しや、転勤は勿論、お寝坊の人はお寝坊、片思いや趣味、宿題、気持ちにも区切りをつけるのに良いチャンスです。3 月卒業時期、区切りをつけるエネルギーに人は満ちてきます。

さて平成 26 年度、Happy-Hamakan-News は臨時増刊号も含めて 8 巻目の発行となりました。学生の日常の中の取り組みや学び、Happy-Hamakan-News に載せきれない沢山の感動がありました。皆様方からもたくさんのご意見や感想をいただきました。今回の「卒業式特集」で今年度の区切りをつけ、Happy-Hamakan-News も新たにスタートなります。来年度もよろしくご支援いただきますようお願い申し上げます。(K.N)

オープンキャンパスや受験情報など詳し
いお問い合わせは

0855-28-7788

浜田　看護学校